

伊藤仁斎と陽明学—その思想形成における接近のもつ意味について—

阿部光磨

従来の仁斎研究において陽明学は、朱子学を離れた仁斎が白骨観を体験するに至って思想的転換を遂げるとの見方を前提に、特に検討もなされぬまま、朱子学から禅学へと傾斜する中に位置づけられるのみであった。こうした理解から脱却すべく、本発表では仁斎の著述文献に即して、陽明学との共通項、生じたであろう違和感を検討し、陽明学への接近のもつ意味を考察したい。

陽明学への接近を自ら回想する際、仁斎は王陽明（守仁）と羅近溪（汝芳）の二人の名を挙げる。後年の仁斎は陽明を厳しく批判し、陽明後学については基本的に言及すらしないが、陽明、近溪の両者と後年の仁斎の間には、自己修養をめぐる問題意識において相通じる点も見受けられる。仁斎の懐いた共感と違和感の肝腎は那邊にあるのか。

陽明も近溪も、性善ゆえに学ばずして実践できる徳行として孝弟に着目し、時にはその一点への収斂を図る。これに対して、仁斎は性善に修養の一翼を担わせつつ、独自の人性論を展開して、恃むべき聖性としての性格を改める。性を恃むべからざるものへと改め、自覚的修養の必要性を確保する。性善あればこそその孝弟に対して、拡充を象徴する忠信を加え、実践の要諦として忠信にもう一翼を担わせることによって「只だ孝弟忠信を言ひて足れり」（『童子問』）と言い切る構造を確立しているのである。

陽明学への接近と独自の思想の形成との間には断絶や反転があるのではなく、両者は連続したものとして捉えられるのではなかろうか。朱子学を離れた仁斎は、問題意識を共有する陽明学に接近し、それに対する違和感を乗り越えたのであって、そこに禅学へ至っての反転を用意する余地は無いように思われる。人が人倫のうちに生きることを大前提とする儒教としての朱子学、陽明学を克服し、修正したものとして、仁斎の思想を捉える見解を提出するものである。